

追悼の辞

専修大学経営学部での研究、教育に、22年間の長きにわたってご尽力いただいた倉持俊弥先生が、2022年（令和4年）9月11日にご逝去されました。ここに倉持先生のご略歴やご足跡、そして本学への貢献をご紹介します、衷心より哀悼の意を表したいと思います。

倉持先生は1958年3月11日にお生まれになり、慶應義塾大学商学部を卒業後、同大学院商学研究科を1983年に修了されています。また、その後タイのタマサート大学で1987年5月に修士号を取得されています。論文のタイトルは、“The Impact of Monetary Policy on Financial Development: A Case Study of Thailand”です。また、タイで学ばれていた頃と同時期に慶應義塾大学大学院商学研究科博士課程にも進学されています。その後、慶應義塾大学国際センター、財団法人国際開発センター、秋田経済法科大学経済学部でのご勤務をなされ、1998年4月より専修大学経営学部にご入職されました。その後、2022年にお亡くなりになるまで、20年以上にわたって本学で教鞭をとられました。

研究面では、国際経済学会、東北経済学会、東アジア経済学会などに所属され、数多くの研究論文を執筆されました。その研究活動は、体調を崩されてからも途切れることなく続けました。2019年には「途上国における金融指標の循環的変動と景気循環の関連性に関する実証分析」、2020年には「途上国における金融発展と経済成長の関連性についての実証分析」、2021年には「途上国における金融的発展と所得格差の関連性に関する実証分析」、2022年には「途上国における貿易と所得・賃金格差の関連性に関する実証分析」を執筆されています（いずれも掲載誌は、専修経営学論集）。これらの研究成果を近いうちに上梓される予定だったのではないかとすると、残念でなりません。

倉持先生は本学の行政面でもご尽力されました。本学に入職後、図書館委員会委員、全学FD委員会委員、自己点検・評価委員会委員、入学試験委員会委員などを歴任されています。教育面でも、先生はお亡くなりになるまで途切れることなくゼミナールを担当しており、学生の教育に尽力されました。倉持ゼミナールからは数多くの俊英が卒業し、社会で活躍されています。

倉持先生は10年ほど前より体調を崩され、ご病気と闘ってこられながら仕事をなさっていました。近年に入職された方の中には、お元気だった頃の倉持先生を知らない方もいらっしゃるかと思います。そこで、この弔辞を書くにあたり、倉持先生のご葬儀の際に喪主を務められた弟の倉持健様から、ありし日の倉持先生のことをお聞きしました。ここにその内容を一部引用させて頂き、私たち教職員も知らない倉持先生のエピソードなどを記させていただきます。

「私たちの父は法政大学文学部名誉教授だった倉持俊一という者です。専攻はロシア史でした…（中略）…。兄は昭和33年に東京で生まれ桐朋高校、慶應義塾大学商学部を卒業後、同大学院（マスター）から同博士課程に進んだのですが、大学院在学中にタイ国のタマサート大学に留学し三年かけてマスターを修得しました。その間、兄は一度も帰国しませんでした。その卒業の際に、タイ国民から非常に敬愛されていた国王ラーマ9世から卒業証書を直接授与されたのが兄の自慢でした（今でも遺影の前に写真を飾っています）。その後研究職、秋田の大学勤務を経て専修大学経営学部勤務させていただくことになりました。

兄は生涯独身でした。20年前に父が亡くなって以来母と二人暮らしでしたが、母が3年前に亡くなるまで約10年間、足の不自由な母の介護をしながらの生活でした。母想いの兄は母の食事の準備にも時間をかけ、身の回りの世話もほとんど一人で行いました。また兄は、兄の甥となる私の息子二人を溺愛し

ていました。父は私の長男が生まれて半年後に亡くなりましたので、兄は父の代わりに自分が祖父になったつもりで子供たちに接してくれているようでした。いつしか兄にとって私の息子たちが生き甲斐になっていたようにも感じます。母に対しても家族に対しても優しい兄でしたが、自らが相手の為と思うとそれが過剰になってしまう場合があります、時として母や私と喧嘩になることもありました。…（中略）…。

兄の趣味は音楽でした。意外に思われるかも知れませんがロックミュージックが大好きでした。特に高校生の頃からデビッド・ボウイという英国のミュージシャンのファンで、本当に最後までボウイの多くのアルバムを愛聴していました。そして兄と六つ年下の弟である私の共通の趣味だったのがギターを弾くことでした。人前で弾くようなことはありませんでしたが、純粹に趣味として家の中で楽しんでいました。

また兄は自然が大好きでした。夏休みは家族と御殿場の山荘で過ごすのを何より楽しみにしていました。自然の中で過ごす心身ともにリフレッシュし、元気になる様でした。そしてタイ国留学以来、タイ料理と辛い食物が好物となり唐辛子は兄にとって欠くことのできない食材となっていました」

倉持先生の研究、教育、学内行政における功績は大変顕著なものがあります。お人柄も温厚で、倉持先生が学部入試委員だった際、先生の下でお手伝いをする役目に就いた私に丁寧に業務を教えて下さったこと、その後も常に「困っていることはないですか」と笑顔で問いかけて下さったことは忘れられません。先生が闘病の苦しみから解放され、安らかに眠り下さいますよう心から願い、これまでの御礼のことばとさせていただきます。ありがとうございました。

令和5年11月

専修大学経営学部長 青木章通